

も真剣に取り組んだ。特に唯一の副業であった刈織りに精出し、戦前の昭和十六年頃から織りはじめ戦後二十三年頃の復興期から三十八年頃まで最盛を極めた。当時の山田八郎村長や増田嘉一農協長の指導督励が功を奏して、村内で戸数の七割が機械を購入し総計五〇〇台にも達した。その頃指導的役割を果たした吉村竹次は、最盛だった昭和三十八年度は年間に三十万枚を織り佐賀県一の表彰を受けたが一枚の価額五〇円とみて楽に一五〇〇万円の副業収入を挙げた」と語るのである。

この村落の西部で作出の龍王神社に近く、しょう洒な建物の公民館が建っている。これは昭和三十九年の創立で室内に入ると、天井と壁の間には副業生産や農協に係る表彰額がずらりと掲げられて、ここに住む先輩の人々の勤勉と栄光を物語っている。その一つに昭和四十一年四月佐賀県農業協同組合連合会より、この中割の農協貯蓄額が一戸平均一〇〇万円を突破したことで感謝状と賞金を贈られている。いかにこの村が協力してがんばったか、そして家計も平均して豊かになったかが証明される。こうして昭和五十二年度には村の北部に面して、約一反歩の広々とした遊園地を完成した。これは圃場整備の余沢もあつてできたもので、子供等の遊び場と共に老人のゲートボール等、幅広い村人のいこいの公園として利用されている。

九 搦

この搦は東与賀町の南東部に位置した大村落で、その東側には八田江湖が滔々と流れて川副町と相對し、北側

は梅田に隣接している。梅田はこの搦とは因縁が深く、昭和二十五年の頃まで「搦北」の名称で呼んでいたが、同三十四年一月よりここから分離独立したものである。古老の話ではこの搦は昔全戸が漁業を営んだが、次第に農業もやるようになり今では半農半漁の家が大部分である。

搦は一名を大搦おおがらみとも言い、明治四年に田八〇町歩の新地開拓と共に、村内をはじめ他地区よりの移住民にて組織されたものである。

その旧藩主時代における耕地拡張事業として、左記の記録がある。

佐賀郡東與賀村大搦

- 一、所在地及地区名 佐賀郡東與賀村大字飯盛大搦
- 二、事業者 舊藩主 鍋島直大侯
- 三、開發面積 田八十町歩
- 四、事業ノ顛末
 - イ、事業施行年月 明治元年着手 同四年竣成
 - ロ、施行方法

埋築ニ要スル材料及經費(不明)ノ全部ヲ舊藩主鍋島直大侯ヨリ支出シ之レニ要セシ人夫等ハ元與賀下郷ノ住民ヲ以テ使用セリ

ハ、経過及成績

竣成後元下郷ノ人民ニ小作セシメ埋築費ニ對スル利子七朱ヲ小作料トシテ徴収シ明治三十一、二年頃鍋島直大侯ハ

埋築當時ノ契約ニ基キ一反歩二十圓ニテ小作者へ賣却セラレタルヲ以テ現今ニ於テハ悉ク村民ノ所有トナリ居レリ
更に本村の郷土調査（大正四年版）には、搦村のことについて次のような記事がある。

本村ハ南方ニ帯有明瀨ニ沿ツテキルノ幾多ノ星霜ヲ經ルニ從ヒ南方に地所ヲ發展シツツアルノデアル平八搦ノ如キ今ハ現ニ一部落ヲナシテ新地タル形跡ヲ認メルノデアル

大搦ハ鍋島藩主ノ築成シタル新地デ八十町餘モアル今ハ悉ク水田トナツテキル 亦授産社搦ハ明治十九年頃佐賀藩一一般ノ率ガ授産金ヲ擲ツテ築キシ所デ七十餘町モアル今ハ大抵水田トナツテキル其ノ他小ナルモノハ幾多モアル

大正三年八月二十五日有明海岸一面高潮ノ被害ヲ受ケタ全搦の堤防モ之レガ為ニ破壊シテ稲作全滅スルノ慘状ニ陥ツタノデアル

搦には集落の外にも、栄徳（新搦）・社搦・歳徳・八段搦（西栄徳）等の搦名がいくつも残っている。こうした搦は昔の先輩たちの知恵と努力によって年々と干潟から拓土へと醸成されたものである。こうして立派な干拓ができて見事な水田が完成すると、まず神に感謝し豊作を祈願するのが人情である。このために歳徳には新地大明神を祀り、新搦には弁財天を祀った跡があるが、これは山田徳次郎が献上したと言われる。また西栄徳には大明神を祀ってあるが、俗に雨乞いの神様と崇敬されており、干ばつが続くとこの神様のお顔に泥を塗ると不思議にも雨が降ると言われている。

この村落で最大で高貴の宮は「西の宮」——で、通称を「搦の山」と言い、海に関係の深い龍王さんと金毘羅さんを石の階段三十五段——その山頂に祠を構築して祀っている。この「搦の山」——は今から百年前に当時の若い青

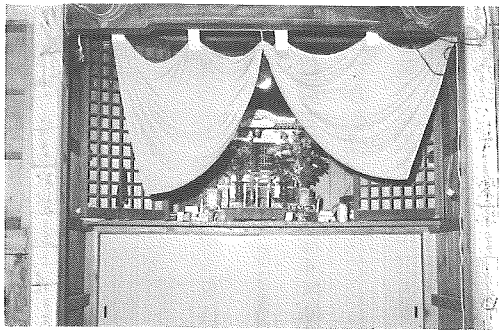
年団員等が協力し団結して、幾百日を費して築き上げたという——まさに汗と力の結晶で、一つは遠くの海上よりの目標となり、また高潮時における海水の被害を防ぎ避難の場所ともなったのである。

「東の宮」——は地藏尊を祀り、天保四年（一八三三年）今から約五十年前に建立されたもので、施主は「搦村中平八」とある。直ぐ側に天照大神・弘法大師・不動明王・十一面観音・天神等を合祀されこの村の人々の信仰の深さを物語っている。

この搦の村落にも寺小屋があった。場所は現在の田中春次宅の西隣りで、海苔の乾燥小屋——これが昔の塾であった。教師はその当時仁戸田勝次（亨）先生で、教えを受けたのは田中惣三郎・田中和吉等である。主に漢字や片仮名の書き方を習い、今から約百年から百年前の慶応時代が一番盛んであったらしい。

この塾のお蔭で村落内は勿論東与賀村内の子供たちは仲間意識が強かつ親密であった。当時八田江を狭んで搦と川向こうの広江の子供同志は、年間を通してよく喧嘩をした。両軍は堤防に陣取って、初めは口げんかからやり出しついに瓦や石ころ・泥等を投げ合つての銃撃戦ともなるのである。

初めは少人数のせり合いであるが、両陣営ともに応援隊を狩り集め、東与賀では中割の故村山健次（元村会議長）が総大将となり、川副組では広江の故原田栄一が総指揮官となって、何十人——百人に近い学童達が



大 師 堂

はでな喧嘩をやったという。これも物の投げ合いから後には濁流を乗り越えて、素裸のままに投げ合いなぐり合つて決着をつけたらしい。今日の児童・生徒のじめじめした少年非行とは異なつて、勇敢な男性的な運動遊戯とも言えるのである。

この擲の祭り行事の主なものを列挙して見たい。

一、金毘羅祭りと英彦山詣

金毘羅祭りは、毎年秋の十月十五日、春は四月頃の二回で大人も子供たちも、各自弁当を持ってお宮に集まり、楽しい一ときを過ごして子供は供膳もいただくのである。英彦山詣では、その前日に村落で、天神さん・伊勢まつり、英彦山祭りをを行い、お供日の十月十五日、村落の代表が英彦山にお参りするのである。

二、わらすば祭り

漁村としての面白いお祭りである。大村落であるので、三班に分かれて、一かい小路(約三十戸)・西小路(約四十戸)・東小路(約三十五戸)が同時日に挙行する。どの班も朝早く学童等は登校前に母親から連れられて番帳さんの家集まる。その家では祝賀の赤飯が炊かれており、「わらすば」おかずにしてたらふく食べるのである。その趣旨は豊漁と感謝の意味であろうが、番帳さんは家廻しにまわされて毎年移動してゆく。これも時代のなすわざか今日では衰微して、最後は田中利八の番帳で終止符を告げた。

三、童行事

この童行事というのは、自己の名前を改めるしきりである。これは男児に限られたもので、十七歳に達すると擲の青年会に入団する。入団するのはお宮の祇園の当日で、入団が決定すれば今まで使用した自分の名前を改

正するのである。例えば田中与一は田中勝次に改名して擲地区のみんなに披露せねばならない。即ち新しく命名された姓名を大提灯に書いて知らせたり、祝酒も何本も買って神に献上し村人の皆さんへ振る舞うのである。言わばこの童行事は昔の元服に似ており、個人の自覚を促し子供の名前から脱皮して青年に成長したという決意と気構えを醸成する目的がある。もしこの童行事を怠つた場合は、その青年は一生涯恥ずかしい思いをしたという。この行事も今日ではほとんど後を絶つてしまったのである。

四、狂言と、もしし講(文珠講)

農村での親睦と娯楽として、この田舎狂言と文珠講がある。狂言は子供と青年の遊戯として往時盛んに流行した。後には大人も老人も参加したり、女役者に小役も出て顔化粧や衣裳服装も工夫され、素人としては珍しくも上手な芝居が演じられた。演題も水戸黄門・佐々木助三郎・真田幸村・猿飛佐助等昔の英雄や豪傑の狂言物が多く上演された。

文珠講の俗に言う「もしし講」は、毎年秋の十月頃の日曜日を利用してやり、普通男女別に開催する。昔は仲間同志が自宅から茶碗に米一杯と金五銭宛を持参して、宿賃しの家で飲食を喜び談笑に花を咲かせて一日を楽しむ。この「もしし講」は昭和時代の今日も続いて、農漁村における親善と融和の中心的な役割を果たしている。